16 カ月児におけるモノの動きと同期するラベルの解釈

—文法的手がかりのもとでのマッピング—

○大竹裕香¹・針生悦子¹

(¹東京大学大学院教育学研究科)

キーワード：言語獲得, ラベリング, 同期

16-month-olds' Mapping of a Novel Word Presented in Synchrony With Object's Motion:

When it is Presented With Syntactic Cues

Yuka OHTAKE¹, Etsuko HARYU¹

(¹Graduate School of Education, University of Tokyo)

Key Words: language acquisition, labeling, temporal synchrony

目 的

大人は、まだ小さな言葉しか持たない子どもにモノの名前を教える時、モノを動かし、その動きと同期させてことばがけを行うという(Gogate, Bahrick, & Watson, 2000)。このことは、名づけイベントを周囲の環境から浮き立たせ、ことばとモノの結びつきを強調する働きがあることが示唆されてきた(Gogate, Bolzani, & Betancort, 2006)。一方で、モノの名前を教える時にモノを動かすことは、ことばの指示対象として、「モノ」だけでなく、「動き」や「モノがそのような動きをすること」も強調してしまう可能性を持っている。Ohtake & Haryu(2013)では、文法的手がかりがない状況で、モノの動きと同期したことばを、16ヶ月児と20ヶ月児がどのように解釈するのかについて馴化スイッチ法を用いて検討を行った。その結果、20ヶ月児はそのようなことばを動きから切り離れた「モノ」に対応づけているのに対して、16ヶ月児はモノと動きを切り離さず、「モノがそのような動きをすること」のように捉えていることが示された。

実際に養育者がことばがけを行う際には、「ワンワンを見て」「ほら、ぶーぶだよ」のように、文法的な手がかりの付与を行うことが多く、乳児のことばの学習を扱った研究では、多くが“Look at the *dax*!”のように、新奇語に自然な文法的手がかりを付与してことばを学習させる。14カ月から16カ月ごろの子どもは、名詞を示す文法的手がかりを理解しており、それをことばの学習に生かすことができる(e.g., Höhle, Weissenborn, Kiefer, Schlz, & Schmitz, 2004; Fennel & Waxman, 2010)。そこで本研究では、ことばがモノの名前であることを示す文法的手がかりがある時、16ヶ月児がモノの動きと同期することばをどのように解釈するかを検討する。

方 法

対象 16ヶ月児15名(男児6名, 女児9名)

刺激 馴化刺激として、2種類のイベント(モノAが動きAをしてAということばが同期/モノBが動きBをしてBということばが同期)を作成した。使用した新奇語には文法的手がかりが付与された(「のーんを見て」「げーんだよ」)。いずれのイベントでも、モノの動きは5回繰り返された。テスト刺激として、馴化試行の2種類のことばそれぞれに対して、①モノのみ変化(object-change 刺激)、②動きのみ変化(motion-change 刺激)、③モノと動きの両方が変化(word-change 刺激)

の3つを作成した。

手続き 馴化試行では、2種類の馴化刺激が pseudo randomize で呈示された。刺激の呈示は infant-controlled で、乳児が1.5秒以上視線をそらすと、その試行は終了した。連続する4試行の平均注視時間が、注視時間の最も長かった4試行の50%以下に減少すると、テスト試行に移行した。テスト試行では、馴化試行で学習したいいずれか一つのことばについて、3つのテスト刺激を、word-change 刺激を最後として、順序をカウンターバランスして呈示した。なお、馴化試行の前と、テスト試行の後に、同じ映像刺激を呈示し、乳児が疲労していないことを確かめた。

結 果 と 考 察

馴化試行の最後の2試行の平均注視時間をベースラインとし、3つのテスト刺激における注視時間と比較した。分析はDunn法による調整を用いた計画的対比によって行った(片側検定)。その結果、3つのテスト刺激の全てにおいて、ベースラインとの注視時間の差が有意であった(object-change: $tD(14)=-3.54$, $p=.005$, motion-change: $tD(14)=-3.26$, $p=.008$, word-change: $tD(14)=-3.16$, $p=.010$)。つまり、16ヶ月児は、文法的手がかりがあっても、モノの動きと同期することばを「モノがそのような動きをすること」に対応づけていることが示唆される。このことは、ことばの意味の過限定とも捉えることができる。これがことばとモノの動きの同期から生じているのか、それとも、そもそも16ヶ月児のことばの解釈の傾向として過限定が見られるのか、非同期の条件を交えて検討することが今後の課題であると言える。

Figure. テスト試行における平均注視時間(単位は秒)